

「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

(ローマ人への手紙5章8節)

伊木一馬の伝道説教

クリスチャン作家、三浦綾子氏が書いた小説の中で、『塩狩峠』ほど大きな反響を呼んだものはない。

明治42年2月28日夜、塩狩峠において、連結器が外れて逆走を始めた列車を止めるために、たまたまその車両に乗り合わせていた鉄道職員、長野政雄(30歳)が自らを車輪の下敷きとし、大事故を未然に防いだ、という実話に基づいている。

小説の中において、三浦氏は、この長野氏(小説の中では永野信夫)がクリスチャンとなった一つの出会いを生き生きと描いている。それは伝道者、伊木一馬の路傍伝道であった。映画『塩狩峠』で伊木を演じた滝田裕介氏は、何度も何度もこのセリフを口にし、ついに、それがきっかけとなってご自身もクリスチャンになったそうである。

以下に、その伝道説教を『塩狩峠』から再現してみよう。



伊木一馬(滝田裕介氏)

人間という者は、皆さん、いったいどんな者でありますか。まず人間とは、自分をだれよりもかわいいと思う者であります。しかしみなさん、真に自分がかわいいということは、どんなことでありましょうか。そのことを諸君は知らないのであります。真に自分がかわいいとは、おのれのみにくさを憎むことであります。しかし、われわれは自分のみにくさを認めたくないものであります。たとえば、つまみぐいは卑しいとされておりまして、自分がつまんで食べるぶんには、いやしいとは思わない。人の陰口ということは、男らしくないことだと知りながらも、おのれのいう悪口は正義のしからしむるところのように思うのであります。俗に、泥棒にも 三分の理という諺があるではありませんか。人の物を盗んでおきながら、何の申しひらくところがありましょう。しかし泥棒には泥棒の言い分があるのであります。

みなさん、しかしわたしは、たった一人、世にもばかな男を知っております。その男はイエス・キリストであります。イエス・キリストは、何ひとつ悪いことはなさらなかった。生れつきの盲をなおし、生れつきの足なえをなおし、そして人々に、ほんとうの愛を教えたのであります。ほんとうの愛とは、どんなものか、みなさんおわかりですか。みなさん、愛とは、自分の最も大事なものを人にやってしまうことであります。最も大事なものとは何でありますか。それは命ではありませんか。このイエス・キリストは、自分の命を吾々に下さったのであります。彼は決して罪を犯したまわなかった。人々は自分が悪いことをしながら、自分は悪くはないという者でありますのに、何ひとつ悪いことをしなかったイエス・キリストは、この世のすべての罪を背負って、十字架にかけられたのであります。彼は、自分は悪くないと言って逃げることはできたはずであります。しかし 彼はそれをしなかった。悪くない者が、悪い者の罪を背負う。悪い者が悪くないと言って逃げる。ここにハッキリと、神の子の姿と、罪人の姿があるのであります。

しかもみなさん、十字架につけられた時、イエス・キリストは、その十字架の上で、かく祈りたもうたのであります。いいですか、みなさん。十字架の上でイエス・キリストはおのれを十字架につけた者のために、かく祈ったのであります。

「父よ、彼らを許し給え、そのなす所を知らざればなり。父よ、彼らを許し給え、そのなす所を知らざればなり。」

聞きましたか、みなさん。いま自分を刺し殺す者のために、許したまえと祈ることのできるこの人こそ、神の人格を所有するかたであると、わたしは思うのであります。

何度も読んで味わいたい不朽のメッセージではないだろうか。



長野政雄氏